

もう15年近くも昔のことでしょうか、上小支部が長野県知的障がい福祉大会の実行委員会当番だった時、それまでの職員研修中心の方式だった大会が、当事者、利用者中心の大会へと舵を切り、初めて利用者の方々がシンポジストとして登壇するという機会がありました（おそらく県内では知的障がいの方がシンポジストになったのは、その時が歴史上初めて？）。そのシンポジウムのテーマは、確か施設職員に伝えたいこと、言いたいことだったと思うのですが、ある方が「担当の職員に煙草を買って来てと、いくら頼んでもなかなか買って来てくれない」と発言したのです。会場中が笑いに包まれました。その方がとても良い人のようで、柔らかな表情をしてその発言をしていたことと、担当の職員が彼のサポーターとして登壇していて彼の隣に座っていたこともあって、さらに笑いの渦は増幅していきました。「あ！やっぱり言われちゃった…」、そんな笑いだったのでしょうか。

しかし、この発言は、実は、私たちが知的障がい・自閉症の方々とおつきあいをしていく上で、とても大切なことを教えてくれています。

「煙草を買って来て」と「はい、わかりました」は、ある種、利用者の方と担当職員との「約束」、「契約」です。会場の方々も登壇している利用者の方も職員の方もニコニコと笑っていたのですが、実は「この私の隣に座っている人は約束をちっとも守らないひどい人なんです」と壇上で告発を受けていたというのが本場の姿なのです。

この連載においてもたびたび触れてきたように、相手を一人前に扱っている証拠は、いくつかの行動として私たちの目の前に現れ出ます。それは、謝罪を伝える「ごめんなさい」や、感謝を伝える「ありがとう」、そして拒否を受け入れる「許容」なのですが、今回の「約束を守る」という姿も、相手を一人前に扱っているかどうかを図る大きなファクターとして私たちの前に現れ出ます。相手の一人前に扱っているからこそ、「約束」を守ろう

としますし、「約束」を果たせないときには、相手を一人前に思えば思うほど、申し訳ないと罪悪感が生じます。だいたい相手を一人前と思わなければ、「約束」という事態が生じません。

また、「約束」を破るときに私たちの罪悪感は、単なる申し訳さだけでなく、「怒られる」「人の道を外れる」といった不安にも起源があります。

ところが、知的障がい・自閉症の方々との「約束」を守らなかつたと言って彼らに直接「怒られた」経験をお持ちの方は意外に少ないのではないのでしょうか？それは、彼らが直接怒りの矛先を職員に向けることができないことが原因であって、「約束」を破られたからといって「怒らない」心優しい人だからではないということに肝に銘じておく必要があります。

「約束」を破られた「怒り」は時にパニックに、器物破損に、他害に、反抗的・挑発的な行動に、あるいは、不眠に、発熱に、下痢になるが故に、それが「怒り」だとは分からないまま過ぎていくことが多いからです。

以前、こんな経験をしたことがあります。ある職員が半年以上も約束を守らなかつた時、J子さんの怒りは爆発しました。「〇〇が悪い！〇〇のバカ！」とその職員の名前は最後まで直接呼ぶことができませんでしたが、大声が数時間に渡り続きました。その職員は、J子さんの前で、じっとその罵声を前に謝罪をし続けながら座り続けることになりました。それは、「約束」を守らなかつた責任を身を持って感じるためでした。

私たちは、彼らが怒っていることも、傷ついていることに対しても思いのほか鈍感なのです。

「煙草を明日買って来て」に「はいわかりました」も、「夕食終わったら電話しようね」も、「あした早番で来るね」も皆「約束」です。強い意志を持って私たちは、「約束」を守ろうとしなくてはなりません。決して、直接怒られないにしても、自ら人の道を外すようなことをしてはいけません。